

# 属性叙述文の時間的意味

福 沢 将 樹

## 1. 導入

「属性叙述」と「事象叙述」の区別は、益岡（1987）によってなされた。遡れば佐久間（1941）（1955）の「品さだめ文」「物がたり文」<sup>註1</sup>以来、三尾（1948）の「判断文」「現象文」、三上（1953）の「名詞文」「動詞文」、佐治（1973=1991）の「題述文」「存現文」を経て益岡に至り、仁田（1991）の「判定文」「現象描写文」と併存する。更に山岡（2000）の「叙述」「描写」の枠組へと精緻化された。これらはいわゆる「ハ」と「ガ」の問題など、日本語の構文論に関わるところが大きく、またニュアンスの違いも多い。一方時間的意味に注目したものとしては八亀（2001）工藤（2002）八亀（2008）のように「質」「関係」「特性」「存在」「状態」「運動」のグラデーションで捉えるものもある。これらは「時間的限定性」という意味の面に重きを置く。こうした研究状況については益岡編（2008）の中で岩男（2008）、真野（2008）の研究史や、形容詞については八亀（2007）（2008）によってだいぶ見通しがよくなってきた。

さて属性叙述の時間的意味を考察するとき、厄介な問題がある。事象叙述であれば「過去」も「未来」もあり、「現在」もある。となれば属性叙述とは「属性」であるから、「超時」ないし「無時間」ということになりそうなのだが、実際はそうでない用例が数多く存在することは先学の指摘するとおりである。なお本稿では基本的に作例を挙げる。

- (1) (猫を抱きながら) 動物って、温かいですね。
- (2) 駄目だ。

(1) は「動物」に関する「属性」として「動物が温かいコト」を述べているようでもあるが、その場の一時的な現象を述べているようでもあり、更にはその場で捉えられた一時的な感覚を口に出しているようでもある。(2) も話題の

事柄に対する「属性」として「ソレが駄目であるコト」を述べているようでもあるが、その場で下された評価を吐露しているようでもある。このように、分析の観点が錯綜しているため、時間的意味とはどういう枠組で記述されるべきかが定まらなると一歩も先へ進めないのである。

一方「主題」ないし「主語」の問題としては、事象叙述文には主題のハがあってもなくてもよい<sup>注2</sup>が属性叙述文には原則として主題のハがある<sup>注3</sup>とされる。これを「主題」の側から眺めると、属性叙述文もあれば事象叙述文もあることになる。これが何を示しているかということ、有題文の場合に属性叙述文と事象叙述文の区別が時に曖昧になるということである。実際次のようなタイプは判断に迷う。

(3) この時計はもう壊れたよ。(すぐ止まっちゃうもん。……)

(4) 友人はフランスに何度も行った。(益岡2008)

(3) は主題「この時計」にまつわる出来事を述べているようでもあるが、「この時計が壊れた時計であるコト」という属性を述べているようでもある。(4)も単に事実を述べただけの事象叙述文に見えるが、主題「友人」についてのある種の評価を含み、「友人がフランス通であるコト」というような属性を述べているようでもある。益岡(2008)はこの例文について「履歴属性」と位置づけている。

そこで本稿で問題とする点は以下の2点である。

①属性叙述は「一時的状態」を含むか

②属性叙述文は「主題」を含み、「主題」を含むものは属性叙述文か

なお本稿は「属性叙述文」と題したが、ここで言う「文」とは複文も含めた「文」の意味ではなく、節のようなものをアバウトに指している。「節(clause, nexus)」というと「主語」が入っていなければならないように聞こえるが、そう踏み込んで考えているわけではない。単文に限って考えれば「文」に一致する。

## 2. 属性叙述とは

益岡(1987)は日本語の文の構造を理解するために「叙述」の類型化を行った。ここで言う「叙述」とは、文の構造を「命題」と「モダリティ」に分けた

ときの「命題」が表現するものであり、次のようなものとして提示されている。

(5) 現実世界を対象として表現者がおこなう概念化 (20頁)

そして叙述は「属性叙述」と「事象叙述」との2つの類型に分けられる。「属性叙述」は (6)、「事象叙述」は (7) と説明される (21頁)。

(6) 現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べる、というものである。或る対象と或る属性とを結びつける、という内容の叙述である。例えば、「その男が優しい(コト)」<sup>注4</sup> という命題は、「その男」という対象と「優しい」という属性を結びつける内容の叙述を表現する。

(7) 現実世界のある時空間に実現・存在する事象 (出来事や静的事態) を叙述するものである。例えば、「雷が落ちる (コト)」という命題は、「雷」の有する属性を叙述しているのではなく、「雷の落下」という事象を叙述しているのである。

更に詳しく述べられる構文的特徴をまとめると以下のようになる (22~30頁より取意)。

(8)	主語の有無	主題の有無	品詞等の傾向
属性叙述文	主語 + 述語句	一般に有題文	名詞 属性形容詞 所有、能力、関係動詞 習慣
事象叙述文	述語句のみ	有題文も無題文もあり	感情形容詞 動作動詞 状態動詞 存在

ここからわかることは、2つの類型の分類基準が、主題の有無や品詞という外形的特徴とは必ずしも一致せず、「主語」なる構文的機能と深い関わりがあるということである<sup>注5</sup>。

では意味的特徴、特に時間的意味についてはどうだろうか。意味の分類には多様な種類があるため、ある種のグラデーションをもった下位分類が必要となる。そこで「属性」にも主語名詞の持つ本質的な属性と一時的な属性があるとして「内在的属性」と「非内在的属性」に分け、「事象」にも「動的な事象」と

「静的事象」があるとする。一時的な「非内在的属性」を表す属性叙述文とは次のようなものである。

(9) あの人はどういうわけか、最近冷淡だ。(33頁)

(10) 花子はパーティーの間中、ずっとわがままだった。(同)

これらの考察から、益岡 (1987) では次のようなグラデーションを示している。

(11) 〈典型的属性叙述〉

↑ 内在的属性叙述

非内在的属性叙述

(中間型)

静的事象叙述

↓ 動的事象叙述

〈典型的事象叙述〉

ここで「中間型」とは、「非内在的属性叙述」と「静的事象叙述」の間であり、次のような有題の一時的状態を表すものである。

(12) 月の出前の海は大そう暗かった。(34頁)

(13) 付近は家屋が密集し、一時は大混雑でした。(同)

一方「静的事象叙述」とは次のように無題文の一時的状態を表すものである。

(14) 車窓に迫った山の新緑の色が美しい。(30頁)

確かに静的事象には主題を想定したくなる。佐治 (1973=1991) が「状況・陰題」と呼んだものには、主題の省略と考えられるもの (丹羽1988 a b) も含むが、無題文の一時的状態、ここでいう「静的事象叙述文」と考えられるものも含まれる<sup>26</sup>。益岡の「事象叙述文」も無題文を典型とするイメージがあったのかもしれないが、無題文のみならず有題文も含まれるため、「中間型」は「事象叙述文」に入れられるべきである。

しかしもし「中間型」の存在理由を維持するとすれば、「有題的事象叙述文」は「事象叙述文」の典型ではないという位置づけを探ることになる。益岡 (1989) にはその方向が窺える。ここでは「真偽判断文」という文類型が提案され、仮説として次のような仮説が提案される (126～7頁)。

(15) 真偽判断文は有題文であり、非真偽判断文（真偽判断のモダリティを持たない文）は無題文である。

「真偽判断のモダリティ」と「属性叙述文」「事象叙述文」との関係は次のようになる（129～131頁より取意）。

(16)		主題	真偽判断
	属性叙述文	あり	あり
	事象叙述文	あり	あり
		単純事象叙述文	なし

ここでは「事象叙述文」を下位分類し、無題のものを「単純事象叙述文」として特立している。その結果「有題の事象叙述文」と「属性叙述文」が似た性格を持つことになった。しかし「事象叙述」「属性叙述」の枠組を崩していないため、「有題の事象叙述文」はあくまでも事象叙述文であり、属性叙述文ではない。

なお「属性叙述文」「事象叙述文」の2分類の枠組は、益岡（2000）で修正されることになる。三上（1953）で「指定」と呼ばれた用法について、一見主題のない形式があった（17b）が、これは「属性叙述」とは異なるものとして「指定叙述」という類型の提案がなされる。例文は益岡に引用された三上のものである。

(17a) 幹事は私です。（ハ指定文）（益岡、48頁）

(17b) 私が幹事です。（ガ指定文）（同）

ここでいう「ガ指定文」を佐治（1973=1991）は「転位・陰題」として「題叙述文」の中に入れる。佐治の用語の場合、（17a）のように戻しても「題叙述文」と呼ぶ分には問題ないだろう。しかしこれを「属性叙述文」という名で呼べるかということ、益岡の言うように問題がある。「私であるコト」は「幹事」の属性ではないからである。従って、益岡（2000）に至って「指定叙述」「属性叙述」「事象叙述」の3分類が提案されたことは正当である。

次に山岡（2000）を見ることにする。山岡（2000）はこれまでの先行研究を批判して精緻な枠組を提示するが、ここで全貌を紹介することはできない。「文機能」を「遂行」「表出」「命令」「演述」の4つに分け、「演述」を更に「描写」「叙述」に分け、それぞれを更に2つに分ける。「演述」について益岡との

対応はおおむね (18) のようになると思われる。なお「指定叙述」に対応するものを山岡に探し求めると、はっきりしないが「関係叙述」の中に含まれるのではないかと思う。もしそうでなければ山岡の枠組では扱われていない類型ということになる。但し山岡の「関係叙述」は名詞述語文に限らずもう少し広い概念であり、また (17b) の「ガ指定文」の語順になったものを含むかどうかははっきりしない。

(18)

山岡(2000)の「文機能」		益岡(2000)の「叙述の類型」		
演述	描写	事象描写	事象叙述	動的事象叙述
		状態描写		静的事象叙述
	叙述	関係叙述	指定叙述	
		属性叙述	属性叙述	

山岡の特長としては、これら「文機能」は動詞分類・形容詞分類とはレベルを異にすること、またこれら「文機能」と語用論に関わる「発話機能」とを分けたことである。後者の点について例えば次のような例文は、文機能としては「演述」であるが発話機能<sup>注7</sup>としては「忠告」になる（但し場合にもよる）、と記述することができるという。

(19) 君は今すぐに行くべきだ。(82頁)

益岡の「命題」は「文機能」のレベルに関わるものであろうが、文となって実際に発話された際には「発話機能」のレベルの洗礼を受けることになる。時間的意味として「現在」であるか「超時」であるかといったことは「命題」のレベル即ち「文機能」のレベルでは完全に決定されず「発話機能」のレベルで最終的に解釈されることになろうと思う。こう考えた場合、山岡 (2000) とは違った枠組が必要とされるかもしれないが、今は方向だけ示しておくこととする。

### 3. 属性叙述の時間的意味論

#### 3.1. 「超時」と現在

属性叙述の時間的意味の典型は、「超時」であろう。しかし、にもかかわらず、「一時的属性」というものも指摘されていることは既に触れた。

(9) 再掲：あの人はどういうわけか最近冷淡だ。

このことは主語（主題）名詞句の「属性」というものが永続的（内在的）なものなのか一時的なものなのかは、そのモノ自体に内在するものではないことと関連している。田村（2008）は「日本は島国だ」のような例文についても個人差が出るとし、「現在、日本は島国だ」が自然に言える話者にとっては「広義の現在」（ここで言う「一時的属性」に相当するだろう）、不自然さを感じる話者にとっては「超越時」（ここでいう内在的属性叙述）であるとする。このように同形の例文についても解釈によるのであり、解釈者の世界観に依存する。かといって一時的か内在的かは連続的なグラデーションを呈するものではなく、本質的に異なるものとして見ておく。

「超時」即ち「内在的属性」を述べていると思われるのに、発話時現在の事象でもあるという例についても最初に触れた。

(1) 再掲：（猫を抱きながら）動物って、温かいですね。

(9) と (1) を比較した場合、発話時の瞬間的な事象であるか否かという点では (1) の方がはるかに発話時現在らしさが強い。にもかかわらず、(1) はやはり内在的属性叙述文である。この事実の示すことは、文の表す事態がいつからいつまで成立する事柄なのかといった客観的なアプローチとは異なる視点を持たなければならないことである。それは、有り体に言えば「意味論と語用論の分離」である。

「意味論と語用論の分離」についてより興味深く本質的な議論を展開するなら「表出」<sup>注8</sup>という発話の類型について論じる方がよいだろう。しかし本稿では「意味論と語用論の分離」についてより興味深い例を取り上げることより先に、属性叙述文と事象叙述文の時間的意味（意味論的）の枠組を提示することを中心とする。

### 3.2. 属性叙述文の意味論的意味

意味論を語るに際して、最初に仮説を言ってしまうことにする。その後で個々の例について中心的意味からの変質や語用論的な影響があるかどうかを記述してゆくという方法を採用することとする。

即ち、「属性叙述」とは福沢（2003）の言う「パースペクチュアリティー」に

関わるものである。「パースペクチュアリティー」には〈未然〉と〈已然〉とがあり、〈未然〉にはいわゆる「現在」や「近接未来」の意味のほか、「可能」や「法則」、「推測」「意志」なども含まれる<sup>注9</sup>。「属性叙述」はこのうち「可能」や「法則」に関わるものである<sup>注10</sup>。〈已然〉はいわゆる「完了」にほぼ相当するが、「パースペクチュアリティー」はいわゆる「アスペクト」とは異なるものとして設定されている。実際Comrie (1976)で「パーフェクト」(英語の現在完了形の意味のようなもの)は本稿の「パースペクチュアリティー」に含まれるものであるが、「アスペクト」とは別ものとされている。

属性叙述をこのように仮定した場合、「パースペクチュアリティー」はテンスの意味(過去・未来)とは異なるものとして設定されているので、過去や未来の場合もありうることになる。つまり「過去の属性」「未来の属性」について述べることができることになる。実際「過去の属性」については「内在的属性」ではなく今は失われた属性である場合や、「内在的属性」ではあっても主語が過去にあった場合や事実認識が過去の時点だった場合がある(高橋1986=1994、八亀2001、2008など)<sup>注11,12</sup>。以下は作例。

(20) ノリコは若い頃は美人だった。(非内在的属性)

(21) 黒沢は偉大な監督だった。(主語が過去の存在)

(22) (旅行から帰ってきて) ドイツはいいとこだったよ。(認識が過去)

〈未然〉の意味は以上のように、テンスの意味の対立を有しており、それは「属性叙述」が本質的属性のみならず一時的属性をも表しうることと整合する。

では「属性叙述文」に〈已然〉はありうるのであろうか。物事の「属性」というものはル形(非過去形)で表されるものが原則であって、タ形で表されたものは(20)~(22)のように「過去の〈未然〉」になってしまうかに見える。またテイル形が「単なる状態」を表す場合なら属性叙述もあろうが、一般にテイル形の〈已然〉の意味が属性叙述を表しうるものであろうか。しかしよく考えてみると〈已然〉が属性を表すものも想定することができるのがわかる。益岡の「履歴属性」といわゆるテイルの「経験・記録用法」である。

(4) 再掲: 友人はフランスに何度も行った。

(23) タケシは若い頃に一度大怪我をしている。



(24) この城は16世紀に武田勝頼によって築城されている。

経験・記録用法のテイル形は過去の事態を表す意味を持っている。従ってテンスの意味としては「過去」のようにも見えるが、「ている」と非過去形をとるところからすると現在の意味をも持ち合わせており、現在基準時において何らかの「効力」を及ぼしているとされる<sup>注13</sup>。

しかしこれが次のようにタ形になると、完全にテンス的意味としての〈過去〉と見たくなる。

(23') タケシは若い頃に一度大怪我をした。

(24') この城は16世紀に武田勝頼によって築城された。

これは冒頭 (3) (4) の例文で触れたものと同種である。単に過去の事象を述べるだけでなく、(23') は主語「タケシ」の何らかの属性を述べ、(24') も「この城」についての属性を述べているように見える。もしそうではなく単なる事象を有題文で表したものだとしたら、確かにテンスの意味の〈過去〉になるが、その場合、主題についての属性という解釈ではなく、発話時現在とは「切り離された過去」として解釈していることになる。

この分析が示唆することは、述語自体は「事象叙述」なのだが構文レベルでは「属性叙述文」として機能する、ということがあるかもしれないということである。(23') (24') の逆のパターンとして、(1) や或いは (22) は、述語自体は「属性叙述」であるが発話機能レベルでは「事象叙述文」として機能している、という分析もできるのかもしれない。もしそうだとすると、これまでの研究枠組を大きく再構築しなければならなくなる。「属性叙述」「事象叙述」という用語で括ることが妥当かどうかも含めて今後の課題としたい。

#### 4. 終わりに

「一時的属性」や「履歴属性」も属性叙述のうちに入れると、「属性」としては典型的でないものも含み込むことになるが、すべて「パースペクチュアリティー」の概念のうちに取りまわることがわかった。しかし「属性叙述」という「叙述の類型」と、時間的意味との間に再考の余地があるかもしれないことも指摘した。なお、「指定叙述」については大きな問題を孕む点がある。「私が幹事

です。」が「幹事は私です。」の意味であって「幹事」が述語名詞ではなく主語名詞だという分析がなされるとすると、連用・連体修飾関係にも波及しては来ないだろうか。

(25 a) ハナコは優しい性格だ。

(25 b) ハナコは性格が優しい。

(25 a) は名詞述語文だが (25 b) は形容詞述語文である。名詞述語文にはさまざまな種類があって分析が難しい<sup>註14</sup>のだが、(25 b) のように変形してやると普通の属性叙述文として分析できるようになる。

言うべきことの10分の1も言いきっていないように思うが、ひとまずここで筆を擱くこととする。

## 注

- 1 藤岡勝二訳、ヴァンドリエス『言語学概論』の「名詞句」「動詞句」にも通ずると佐久間是指摘している。
- 2 益岡 (1987) の位置づけによる。
- 3 益岡 (1987) では原則としてこう位置づけられていたが、例外もあった。その後益岡 (1989)、益岡 (2000) で修正が加えられた。この点については後述する。
- 4 引用者注：ここでは「命題」を表示しているので、「その男が」という表記は「は」ではないことを示しているわけではない。
- 5 なお「主語」という用語・内容については本稿ではこれ以上深入りを避けておく。
- 6 佐治の「状況陰題文」という概念には丹保 (1986) (1988) も疑問を呈している。
- 7 山岡 (2008) では発話機能の分類に若干の、しかし大きな修正がある。
- 8 カール・ビューラーに起源を有し、仁田 (1991) 益岡 (1989) 山岡 (2000) などに見られる。
- 9 福沢 (2002) ではこのほかに「非時間的」も設けてある。福沢 (2003) の書き方では却って解りにくくなってしまっている。また〈予定〉の扱いについてはその後も悩んでいる。
- 10 福沢 (2002) (2003) の時点では属性叙述・事象叙述といった観点について理解が足りなかったもので、記述が錯綜している。この点、機会を作って撤回・修正を施したい。
- 11 いわゆる「ムードのタ」について本稿では触れないが、興味深いことが言えるはずである。
- 12 「未来の属性」については作例でも多少作りにくいようである (八亀2001) が、語用論的・認知心理学的な要素が関わっているかもしれない。
- 13 工藤 (1995) の「パーフェクト」に詳しい。
- 14 新屋 (2009) に名詞述語文が形容詞述語文に比べて用法が広いことが指摘されている。なお名詞述語文の時間的意味について専門に論じたものとして田村 (2008) がある。

参考文献

- 岩男考哲 (2008) 「叙述類型研究史 (国内編)」益岡編 (2008)
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 工藤真由美 (2002) 「現象と本質——方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法』 2-2
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』育英書院
- 佐久間鼎 (1955) 『日本語のかなめ』刀江書院
- 佐治圭三 (1973) 「題述文と存現文」(『日本語の文法の研究』ひつじ書房、1991、所収)
- 鈴木重幸 (1996) 『形態論・序説』むぎ書房
- 高橋太郎 (1986) 「形容詞のテンスについて」(『動詞の研究』むぎ書房、1994、所収)
- 田村澄香 (2008) 『現代日本語における名詞文の時間表現』溪水社
- 丹保健一 (1986) 「「月がきれいですね。」の文法——「が」「は」使い分けの語彙、語用的条件——」『日本語学』 5-2
- 丹保健一 (1988) 「状況陰題文とは何者?」『三重大学教育学部研究紀要人文・社会科学』39
- 新屋映子 (2009) 「形容詞述語と名詞述語——その近くて遠い関係」『国文学解釈と鑑賞』74-7
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 丹羽哲也 (1988 a) 「有題文と無題文、現象 (描写) 文、助詞「が」の問題 (上)」『国語国文』57-6
- 丹羽哲也 (1988 b) 「有題文と無題文、現象 (描写) 文、助詞「が」の問題 (下)」『国語国文』57-7
- 福沢将樹 (2002) 「〈未来〉と〈必然〉」『愛知県立大学文学部論集 (国文学科編)』50
- 福沢将樹 (2003) 「〈未来〉と〈必然〉(続) ——ル形の意味論——」『愛知県立大学文学部論集 (国文学科編)』51
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法——日本語文法序説——』くろしお出版。引用は1995年第4刷。
- 益岡隆志 (1989) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡編 (2008)
- 益岡隆志 (編) (2008) 『叙述類型論』くろしお出版
- 真野美穂 (2008) 「叙述類型研究史 (海外編)」益岡編 (2008)
- 三尾砂 (1948) 『国語法文章論』三省堂、(『三尾砂著作集 I』ひつじ書房、2003、所収)
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院、(くろしお出版、1972、復刊)
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版
- 八尾裕美 (2001) 「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究』別冊 1
- 八尾裕美 (2007) 「形容詞研究の現在」工藤真由美 (編) 『日本語形容詞の文法』ひつじ書房
- 八尾裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究——類型論的視点から』明治書院
- Comrie, Bernard (1976) Aspect. Cambridge University Press. (山田小枝 (訳) 『アスペクト』むぎ書房、1988)